○o◌もんずら

奥島教育長コラム　№.19　２０２４．１０．１

暮らしの時間

普段、おかずの支度は全て姉がしているが、今夜はキャベツだけ細く刻むだけにして、フライは父親が自分で揚げた。煮えた油の中でパン粉の焦げるいい匂いが、家の中にこもった。四人家族で六尾では、配分がむつかしそうに思われたが、父親が明快に、
「お前(め)と姉(あんね)は二匹ずつ食(け)え。おらと婆(ば)っちゃは一匹ずつでええ。」
と言って、その代わりに、今朝釣ってきた雑魚をビールの肴にした。くし焼きにしたまま囲炉裏の灰に立てておいたのを、あぶり直して、一尾ずつくしから抜いてはしょう油をかけて食った。

――三浦哲郎(てつお)『盆土産』
（光村図書　国語２：中教科書）

（みつえ　５才）
おちゃわんに　よそった
ごはんから　けむが　でてると、
おなかが　だんだん　すいてくる。
ごはんのけむが　はなから　はいって
おなか　すけ　すけって
くすぐるからだよ　きっと。

――清水えみ子『ちがうぼくととりかえて』

食卓に向かう様子は、さまざまです。共通するのは、思いが込められている大切な暮らしの時間であること。

夕方の三十分　　黒田三郎

・・・・・・・・・・・・
「ホンヨンデェ　オトーチャマ」
「コノヒモホドイテェ　オトーチャマ」
「ココハサミデキッテェ　オトーチャマ」
卵焼きをかえそうと　一心不乱のところに
あわててユリが駆けこんでくる
「オシッコデルノー　オトーチャマ」
だんだん僕は不機嫌になってくる
化学調味料をひとさじ　フライパンをひとゆすり
ウィスキーをがぶりとひと口
だんだん小さなユリも不機嫌になってくる
「ハヤクココキッテヨォ　オトー」　「ハヤクー」
かんしゃくもちのおやじが怒鳴る　「自分でしなさい　自分でェ」
かんしゃくもちの娘がやりかえす　「ヨッパライ　グズ　ジジイ」
おやじが怒って娘のお尻をたたく
小さなユリが泣く　大きな大きな声で泣く
それから　やがて
しずかで美しい時間が　やってくる
おやじは素直にやさしくなる
小さなゆりも素直にやさしくなる
食卓に向かい合って二人座る

――詩集『小さなユリと』